

社会精神居住施設 Solvang（ソルバング）を訪問して

＜感謝と幸せな気持ちを胸いっぱい＞

レポート：善家トシコ

★心温まる歓迎に感激

4 日目に訪問した社会精神居住施設 Solvang（ソルバング）は、精神疾患を持つ利用者が住宅契約を結んで入居している施設です。入居者は 33 名、スタッフは 50 名だそうです。

訪問したときまず目についたのは、日本の国旗がいたるところに飾られており、この日のために準備していただいたんだとうれしい気持ちになりました。

またどの職員の方も笑顔が素敵でさらに心が温かくなり、帰ったら「笑顔」を忘れないでいようと思いました。

★リビングで家族のように

ここで一番長い入居者は 30 年だそうです。1998 年に生活支援法からサービス法に制度が変わり、「施設」という名称も無くなり人が中心の制度になりました。それまでサービスを受けるのみであった人が一般の人と同じように年金をいただき、自分で税金を払い、自分で好きなサービスを選択できるようになりました。呼び名も「入所者」から「入居者」になりました。「入所者」の頃は作ってもらった食事を、全員が同じところで食事して、部屋は暗く長い廊下の左右にあり、トイレも暗い場所にあった。

「入居者」になって、一緒に食事を作り、リビングで家族のように食事をし、アクティビティーも豊かになったということでした。部屋も個々の好みが反映されており、個性豊かでした。

★スタッフや入居者の意識改革



1998 年に制度がサービス法に変わった理由は、「政治の変化」ではなく時代とともに自立・エコノミーの考え方に変わったためだそうです。すべてサービスするのではなく、サービスを選択することでかえって安価になる、そして自己の尊厳という考え方です。

またスタッフも入居者も意識改革が必要になりました。スタッフは色々なバリエーションのサービスを学び、入居者は「自立」した生活をしなければならないという一面もあります。

★その人の人生をとめることはできない

入居は重度の精神障害を持つ人であり、アルコール中毒、認知症などさまざまな心身の障害を持っています。

障害者といえども個々の「人生の夢」や「生き方」を持っています。しかし、職員個人の責任で障害を持っている人の「人生」への支援の仕方は困難も多いようです。

糖尿病やアルコール中毒の利用者に対しても、「その人の人生」で「禁酒」などとめることができないようです。「この方が良いでしょう」というアドバイスができるくらいで、

他の人の迷惑にならない限りは、その人の人生をとめることはできないということです。

★生きていることが実感できる生活

デンマーク社会が求めている人間像は「自分で物事を考え、判断できる自立した人間」とのことで、ここでも「自己決定」「自己管理」という「個の尊厳」が徹底されていました。

しかし支援は困難を極めると思われ、研修メンバーから、「支援の判断基準」はあるかという質問が出ました。「判断基準」は特になく、入居者と一緒に「生活プラン」をつくり、本人と話し合いができない人に対しては、スタッフが「良いと思うプラン」を作り、3ヶ月毎に支援計画の評価をするということでした。

★努力の先にあるもの

育成会でも6ヶ月毎に支援計画のモニタリングを行っており、利用者に「良い支援」をしたいと努力している点は、デンマークも日本も同じのようで、安心できました。

入居者と一緒にランチをいただき、中能さんの自慢のマジックと一緒に楽しみ、楽しい時間を過ごしたあと、バスが玄関を出るまで職員と利用者が見送っていただき、感謝と幸せな気持ちを胸いっぱいソルバングを後にしました。



<プチホテルのような玄関>